

平成29年4月12日

新潟大学

— 新潟市東区牡丹山諏訪神社古墳の調査成果 — 新潟県内最古・日本列島最北の出土となる 古墳時代中期の鎧を発見

人文学部の橋本博文教授が代表を務める牡丹山諏訪神社古墳発掘調査団では、このほど、同古墳において新潟県最古となる古墳時代中期の鎧を発見しました。これは古墳時代の鎧としては日本列島最北の出土例でもあり、今回の発見は、ヤマト政権の版図やヤマト政権と牡丹山諏訪神社古墳被葬者の関わりを考える上で重要な手がかりとなります。

I. 研究の背景

新潟県内で初めて円筒埴輪を伴った古墳として確認されている、新潟市東区の牡丹山諏訪神社古墳は、2013年にその存在が知られ、2014年から毎年、新潟大学人文学部考古学研究室を中心にした「牡丹山諏訪神社古墳発掘調査団」により調査が行われています。

II. 研究の概要

【牡丹山諏訪神社古墳第3次調査のまとめ】

①埋葬施設に関しては、昨年度の2次調査で墳頂参道西側より検出した粘土集積を立ち割った結果、その下の白色砂層のさらに下方から現代磁器が出土したことより、粘土集積は古墳時代のものではなく現代のものの可能性もでてきました。しかし、部分的な攪乱の可能性もあるので、今後慎重に検討していきたいと思えます。

②粘土集積周辺の調査の結果、粘土の下に墓坑状の掘り込みがある可能性が高まりました。掘り込みは東西4m43cm、南北4m40cmのほぼ正方形で、深さ55cmほどです。これが確実に墓坑ならば、棺の位置は現・コンクリート製参道の真下となります。

③先回の調査で土製玉類の多く出土した墳頂東区では玉類の下方から埋葬施設は検出できませんでした。ただし、掘り込みが確認され、後述する鉄製品の断片が出土しまし

た。しかし、掘り込み中から磁器片が出土したことより、攪乱坑と判断されました。

④墳頂部南西部の調査で、外縁部近くから円筒埴輪片を数点検出しているため、墳頂平坦面外縁部に円筒埴輪列が存在したものとみられます。

⑤残りの比較的良い墳丘北東斜面に入れた発掘区、第7トレンチで、円筒埴輪片が多量に出土しました。中段部に置かれた埴輪と考えられますが、基部は据えられた状態の原位置では確認されませんでした。ただし、基部は下方に落ち込んだ状態で数片出土しています。

⑥昨年度発見されたのと同様な赤色塗彩された土製勾玉が墳頂部北東区で2点確認されました。これにより、昨年度、想定した東・西・南・北と中央に規則的に玉類を置いたという考えに再考の余地が生じました。あるいは、一連のもの緒を切って撒いた可能性も想定されます。

⑦墳頂部で土師器埴や煤の付いた土師器甕、墳頂に近い第7トレンチの最上部で赤色塗彩した土師器埴を検出しました。葬送儀礼に伴う祭祀に使用したものとみられます。

⑧墳丘南側で今回の調査で新たな須恵器の器台片は確認されませんでした。

⑨3次にわたる調査で、今のところ確実な形象埴輪を確認していません。もともと形象埴輪を受容していなかった疑いもありますが、1片だけ断面形がきれいな円弧を描かず、やや直線的なものが認められたので家形埴輪等の形象埴輪が存在する可能性も残されています。

⑩須恵器器台の破片の出土している墳丘南側において造り出しの有無を確認したところ、造り出しが検出されました。

Ⅲ. 研究の成果

今回の牡丹山諏訪神社古墳調査の最大の成果は、副葬品と考えられる鉄製品が確認された点です。それは鉄板2枚のそれぞれに円孔を穿ち、そこに革紐を通して綴じ合っています。肉眼では不確実でしたが、新潟大学医歯学総合病院診療支援部によるX線撮影により確証を得ました。それが、新潟県内では南魚沼市飯綱山10号墳の2点の短甲等に次ぐ4例目となる鉄製甲の出土ということにとどまらず、新潟県内最古の甲となること、さらには日本列島最北の古墳時代甲冑の出土例になるということで重要であります(橋本・鈴木2014)。すなわち、飯綱山10号墳では鉄覆輪と皮包み覆輪の横板板釘留め式短甲2領が出土しており(橋本1998)、皮綴式短甲の本例は技術的にそれらに先行することになります。

すると新潟県内では、約650基の古墳中2基のみ埴輪が確認されているうちで、壺形埴輪をもつ飯綱山10号墳と円筒埴輪をもつ牡丹山諏訪神社古墳にそれぞれ短甲が存在することになりました。ヤマト政権にとって如何に両古墳被葬者が重視されていたかを



物語るものと言えるでしょう。

その他、須恵器器台破片の出土位置から当古墳に造り出しの存在が想定されましたが、今回の調査で、想定どおり、円丘の南側に造り出しの付くことが明らかになりました。幅約 6m、長さ約 5m ほどで、造り出し部の長さは円丘部直径のおよそ 6 分の 1 に相当します。よって、『前方後円墳集成』（近藤 1992）の定義によれば円丘部直径 4 分の 1 以下ということで、帆立貝式古墳ではなく、造り出し付き円墳の範疇に入ります。帆立貝式古墳と造り出し付き円墳では階層的に前者の方に優位性があるとされていますが、同時期の 5 世紀前葉では太平洋側に帆立貝式古墳の東京都野毛大塚古墳が築造され、一方の日本海側では造り出し付き円墳の牡丹山諏訪神社古墳が造られたこととなります。両者とも埴輪を樹立し、副葬品に皮綴式短甲を副葬しますが、墳丘規模は圧倒的に前者の方が勝っています。なお、野毛大塚古墳からも牡丹山諏訪神社古墳と同様な須恵器器台が出土しています。

須恵器器台の出土地点としては、筒形器台ではありますが茨城県権現山古墳（小澤 2016）の前方後円墳造り出し部、筒形器台と高坏形器台の福井県兜山北古墳（前田 2001）の造り出し付き円墳造り出し部の例など、造り出し部からの出土が目立ちます。造り出し部における供献儀礼に使用されたものと考えられます。

IV. 今後の展開

今次の調査で、副葬品の一部が墳頂部から出土しましたが、それは断片であり、しかも出土地点が攪乱層中ということであって、埋葬施設の一部は既に破壊されていることとなります。今後破壊されていない埋葬施設の一部が発見されれば、その他の副葬品の様相を明らかにすることが期待されます。

本件に関するお問合せ先

新潟大学人文学部教授 橋本 博文

E-mail : g0276451311@yahoo.co.jp